

子どもが扉をあけるとき



松田司郎

子どもが扉をあけるとき

児童文学論集Ⅱ 文学論

松田司郎

1942年大阪生まれ。2歳から6歳まで島根の山村で過ごす。大阪府立高津高校を経て、同志社大学文学部英文学科に学ぶ。在学中は外国の文学にとりつかれていたが、宮沢賢治によって児童文学の目を開かれ、創作を志す。卒業後（1965年）出版社に勤務し、児童図書の編集に携わる。1984年秋退社し、児童文学の創作と研究に専念する。現在NHK童話教室、絵本学校等の講師をつとめる。日本児童文学者協会会員、日本児童文学学会会員。同人誌『きっとなっぷ』主宰。創作に「ウネのてんぐ笑い」「おゆん」（以上理論社）「まだらのおにろく」（金の星社）「花あかり」（小学館）「海のぼうや」（学校図書）「そらをとんだくじら」（太平出版）など。評論に「現代児童文学の世界」（毎日新聞社）「ページのなかの子どもたち＝児童文学論Ⅰ作家論」（五柳書院）など。翻訳に「ハビランドの昔話＝美しいワシリールサ」（学校図書）などがある。現住所・大阪府富田林市不動ヶ丘町11-2

「子どもが扉をあけるとき」

昭和60年1月15日初版発行

著者 松田司郎

発行者 小川康彦

発行所 五柳書院

東京都千代田区一ツ橋2-6-13

〒100 電話〇三（二六四） 四四二九

振替 東京2-87479

印刷所 誠宏印刷

製本所 越後堂製本

定価 二、〇〇〇円

子どもが扉をあけるとき

装帧 長谷川集平

目次

児童文学のひろがり 7

- 1 児童文学の条件 8
- 2 ファンタジーの構想力 19
- 3 メルヘンの復権——立原えりかを通して 33
- 4 ロマンの復権——『むくげとモーゼル』を通して 45
- 5 伝奇小説におけるロマン——ハガードの作品を通して 52
- 6 魅力ある悪漢像——ステイプンスンの作品を通して 61
- 7 魅力ある子ども像——『赤毛のアン』を通して 72
- 8 「歴史小説」の方法 82
- 9 同人雑誌運動論 96
- 10 書くことの意味——「子ども」との再会 108

児童文化のなかで 123

1 新しい親子関係をさぐる 124

2	母であること子であること	140
3	老いることの意味―老人と子ども	147
4	二つに引き裂かれた夢―子どもの中の成長と帰郷	157
5	ディスクールリング論	164
6	非行の書、人間の書	169
7	「小人」のその後……	173
8	「児童文学」の日々	178
9	文明と自然	183
10	アホウドリにあいにくあった	190
11	突然、メガテリウムが現われた！―大人と子どもが出会うとき	197
12	川遊び―「領域」としての子ども	210
13	無垢へのノスタルジア―「文明」と子ども	223

絵本をたのしむ 235

1	絵本プロボーズ大作戦	236
2	絵本の大人はなれ	245
3	絵本の旅	261

『ピーターラビットのおはなし』	ピアトリクス・ポター	261
『チムとゆうかなせんせんちようさん』	エドワード・アーディゾーニ	263
『ちいさいおうち』	バージニア・リー・パートン	265
『げんきなマドレーヌ』	ルドウィッヒ・ベームエルマンズ	266
『もりのなか』	マリー・ホール・エッツ	268
『あおくんときいろちゃん』	レオ・レオーニ	270
『おやすみなさいフランチス』	ラッセル・ホーバン	272
『エミールくん、がんばる』	トミー・ウンゲラー	274
『ゆきのひ』	E・ジャック・キーツ	276
『かいじゅうたちのいるところ』	モーリス・センダック	277
『ふたりはともだち』	アーノルド・ローベル	279
『さむがりやのサンタ』	レイモンド・ブリッグズ	281
『ふきまんぶく』	田島征三	283
『ごろごろにゃーん』	長 新太	284
『ねずみくんのチョッキ』	上野紀子	287
『のらいぬ』	谷内こうた	288
『100万回生きたねこ』	佐野洋子	290
『ふしぎなえ』	安野光雅	292
『かいぶつになっちゃった』	木村泰子	294

『いぐいぐいぐいぐ』 梶山俊夫 296

『このひもは?』 木曾秀夫 298

『いちご』 新宮 晋 299

『多毛留』 米倉斉加年 301

『たろうとつばき』 渡辺有一 303

付・大人に贈るブック・リスト 306

児童文学のひろがり



1 児童文学の条件

私は、不幸なことかもしれないが、大人になって「児童文学」というものに会った。出会ったというよりも、「児童文学」といわれるいくつかの作品によって、目を開かされ、啓示を受けたといった方がよいだろう。

それは「鹿踊りのはじまり」（宮沢賢治）や「さる王子の冒険」（デ・ラ・メア）や「たんぼのお酒」（ブラッドベリ）といった作品だったが、以来私は「児童文学」というもののとりこになり、傲慢にもその正体を自分の目で見極めたいと思った。

私は、結果的に三つの方法でアプローチを試みたことになる。しかし、お恥ずかしい話だが、私の対応は非常に浅薄で性急でちゃんぽらんであった。

一つは、子どもの本の職業編集者としてであった。（これは私の人生にとって最大の幸運といってもよいかもしれない）そして、作家の創造した原稿の第一の読者である誇りを通して、私は不遜にも自身で作品を書き出した。

初期の作品群は、「児童文学」を明確には意識しなかった。意識しようにも、私には何も分らなかったし、それにまず書く必要があったのだ。

しかし、二番目の幸運が私を数冊の作家に仕立て上げたときから、私は「児童文学とは何か？」

という命題を抱えて悩んでしまった。

私は長い間その答えをつかむことができなかった。そこで私は、内外の作品をむさぼり読み、研究書や評論書や論文に目を通すようにした。そして、私は迷いのままに、またまた厚顔にも拙文（評論）を書きはじめた。

私は歩きながら、多くの人々からの助言を求めた。〈答え〉は二〇年経った今でも、なお明確ではない。それは、多分私自身が《作品》を創造することによって、達成されるべきものである。

しかし、一枚のガラス板を通して、水槽の中の魚をのぞくように、外側から眺望することは可能かもしれない。そう思っ、私は『現代児童文学の世界』（毎日新聞社）を書いた。

その論旨をベースにして、今回は具体的な作品にそって〈児童文学の条件〉を分析してみたいと思う。その分析した条件は、私が長い間（二〇年間）の職業編集者として身につけたものである。

※

思えば編集者というものは悲しいものである。自身の楽しみのために本を読んでいても、無心に徹することがまず少ない。ある種の職業的習癖がどこかでにらみをきかせている。過言すれば、プライベートな読書というものが既に犯されている。それが直接的に仕事と関わる場合はもう絶望的である。

こんな風を書くとなにを大仰なことをと先輩諸氏の嘲笑をかうかもしれないが、多少のちがいはあれ編集者の意識というものが存在するのは事実である。

職業的習癖とはいかなるものかといえば、商品としての価値を嗅ぎわけ、分析する意識のことである。本を読んでいる（それが子どもの本の場合とはくに）私は無意識のうちに「分析の四か条」に従って値ぶみしている自分を発見する。

すなわち、①子どもの視点 ②新鮮なドラマ ③現代への切り込み ④文学作品としての完成度——の主として四つである。

本というものは、私たちがその作品世界に能動的に働きかけ、すべりこみ、もぐりこみ、やがて「没我」としての喜びを感受するものであると思う。私たちは作品に主体的に働きかけるが、同時に作品がもつ目に見えない力によっても左右されているのだ。その力が巧みで強ければ、恐らく私たちは一切の現実的意識をとびこえ、作品世界のもつもう一つの現実でワレヲ忘レテあそび楽しむことができるのだと思う。

しかし、残念ながら、私のもつ傲慢な職業意識を吹きとばしてくるような作品には、そうたびたび出会っていない。『家出—12歳の夏』（注1）は、没我の喜びを与えてくれた数少ない作品のうちの一つである。この作品に沿って、児童文学の条件といったものを検証してみよう。

『家出—12歳の夏』はアメリカのイリノイ州で生まれ、オクラホマ大学で学んだ寡作な女流作家マリオン・デーン・パウアーの初めての作品である。荒野が果てしなく広がるアメリカ南部の高原地帯を舞台に、多感な少女が、生きることには疲れ自暴自棄のまま迷いながら、一人の人間に接することによって自己を発見する物語である。

少女の名はステイシー。酒におぼれて家族を捨てた母親、新しい妻との生活に満足し、少女のことをかえりみない父親。どこにも入り込む余地はない。何にも意味を見つけないことができない

……ステイシーはそう思って発作的に家をとびだす。

しかし、荒野には一滴の水もからだを休める木陰もなく、昼間の猛暑に比べ夜になると反対にものすごく冷えこむ。酷しい自然を受け入れ、戦うすべてを知らないステイシーは、のちにニムエという名前の分る大きな犬のあとを追って、谷間にひっそりと暮らす老婆の家にたどりつく。

だれかがきつと理解してくれるだろうとセンチメンタルに想う少女に反して、エラばあさんはひとかけらの甘さも必要以上の言葉も持ち合わせていない。食料や寝る場所は提供してくれるが、ステイシーの心の中に笑顔でわけ入り、温かく包んでくれない。

エラが住んでいるのは、オクラホマのフライパンの柄とよばれる酷しい自然の荒野である。ここでは、考えたり、泣いたり、甘えたりしている暇はない。わずかばかりの畑地を守り、自然の恵みと冷酷さを受け入れて暮らすほかない。ステイシーは欲求不満となるが、じっとしては何にもならないことを理解する。やがて、水をくんだり、たきつけたたり、寝床を整えたりという、自分が生きるために必要なことを自力でやりはじめる。

エラが谷底で足をくじいて倒れているあいだ、一人切りになったステイシーは苦境に立たされる。エラの搜索とニムエという犬のお産——甘えることの無意味さを知ったステイシーは、少女をたよりにしてうめきつづける難産の犬のために、赤んぼうをとりだしてやる。エラを見つけ苦勞して連れてかえるが、くじいた足がおもわしくなく床に寝ついてしまう。

ステイシーがとりあげた犬のうちの一匹が口に障害をもっていることが分る。エラに見せると殺せと言われ、ステイシーはまのあたりに見た生命の誕生を思い出して逆らう。しかし苛酷な自然が子犬を受け入れることのないことを知ると、涙しながらも自ら手を下す。

生きることの意味を少しづつ捉えはじめたステイシーの心は次第にエラに対して開かれ、遠い昔夫に捨てられ、夫とともに切り拓いた谷間の地を守りつづける一人の人間の生命の重みをさぐりはじめる。ステイシーは、なお迷いながらもエラを助けようと町までエラと親しい老人を呼びにいき、エラのもとにもどる途中で自らの場所の大切さを認識する。物語は、ステイシーが家に帰り、新しい生活をやりなおす決心をするところで終わっている。

重々しく暗く辛いテーマをもった作品である。子どもの本は楽しみのためにあるという。それは当然である。しかし、楽しみというものを甘い綿菓子のように一面的に軽々しく捉えてはならない。

確かに子どもたちは、腹の底から笑ったり、謎解きのゲームに熱中したり、現実世界で起こりそうにない幸運を経験したりすることを好む。孤児に父母ができたり、テストで百点をとったり、急に強くなつて番長をやつたり、大金持ちになつたり……。それは確かに痛快なことにはちがいない。しかし文学というものは決して「代用の幸福」を与えることを意図するものではない。そういうことが作品の中で結果的に起こつたとしても、それらの変化が私たちが生きていく人生にとつていかなる意味があるのか、人間存在のありのままの真実とどうわちがたく結びついているのか、といったことが描かれていて初めて感動にまで高められるものである。『家出—12歳の夏』は風俗小説でもないし、娯楽小説でもない。児童を読者とする文学作品である。文学を真剣に楽しみ、味わうことのできる作品である。

さて冒頭に述べた商品価値の四か条に照らし合わせて眺めてみよう。

第一の子どもの視点ということは、十二歳のステイシーの目の高さ、思考、感性にそつて作品

が展開されているかどうかという点である。第二の新鮮なドラマということは、作品の土台となるその虚構性とその展開のさせ方である。文学であるからには、事実をそっくり写しとったり、人づての聞き書きを記録するだけでは成立しない。それは究極人生のそして人間の真実を突くものではあるが、赤色を赤色らしく、青を青らしく見せるためには独特の工夫がなされなければならない。それが文学における虚構の問題である。

なお、複雑な心理描写や抽象的な概念の展開を理解することに慣れていない児童にとって、そしてお話づくりの筋の発展に人生の基本的な起伏を重ね合わせて楽しむという習癖が色濃く残されている年代の児童にとって、物語（虚構世界）の進め方、その構成が重要な鍵をにぎっているのはいうまでもないだろう。

第一の視点の問題に関していえば、十二歳という多感でひとりよがりで傷つきやすい年頃の目を考慮して巧みに描写されているのがよく分る。

しかし、第二のドラマの展開に関していえば、筋は余りにもシンプルで、起伏のある発展は望めない。家を出、荒野で迷い、犬に会い、おばあさんの家からだを休め、犬のお産を助け、また家へもどってくる——たしかに劇的な展開、息をのむ緊張感、盛り上げるクライマックスといった熱っぽさには欠ける。しかし、よくよくステイシーの気持ちにそって読みすすんでいくと、非常に緊迫した展開であるのがよく理解できる。

この問題は第三の現代への切り込みと深く関わっている。つまり、ステイシーにとって抜きさしならない生きる意味、拠り所が問われている以上、スローテンポなドラマ展開とは無関係に、その心の底には生きて在る存在がぎりぎりのところで火花をちらしているのである。

第三の現代の切り込みの問題と合わせて考えてみよう。人はいったん過ぎてしまうと子ども時代のことをすっかり忘れてしまいが、思い出したとしても甘美な楽しい時代としてロマンチックに考えるかもしれない。あるいは全く逆に、痛めつけられ傷つけられ、出口のない暗い迷路の奥で悲しみにふけた陰惨な時代と決めつけるかもしれない。

しかし子ども時代は他の時代と比べてとくべつ幸福でも不幸でもない時代だと思える。とりわけ十代に入って間もない子どもたちにとっては、自己とは何かという避けることのできない暗くて重い問題を引きずりながらも、やがて不斷に変化しながらも不変の統一体としてのおのれを発見するという至福の瞬間を迎える時期でもある。

パウアーはこういった子どもの問題を現在という状況の中でつかもうとしている。親の失業やアル中や暴力、不理解や無気力や溺愛、両親の不和、離婚、家庭の崩壊といった問題は、今日では決して特殊な状況ではない。とくに一九七〇年代以降のアメリカでは深刻な社会問題である。真剣に生きようとしながらも傷つき挫折していく大人たちに悲哀を感じるが、しかしいつの場合もいちばん損な目を見るのは子どもたちである。親たち以上に、子どもたちが最も危険な苦境に立たされるのである。自分を失い、自棄になって途方にくれても、子どもたちを慰めてくれるものはいない。子どもたちは大人たちのように酒や賭ごとやセックスに身をまかせる自由さも持ち合わせていない。

パウアーは、十二歳の少女を通して現代の人間の状況を突いている。アイデンティティ（自己確認）という尊厳なテーマを人間同志の安易な励まし合いによって解決するのではなく、人間を自然の酷しさと対峙する存在として高めることによって、児童文学はもちろん大人を読者とする